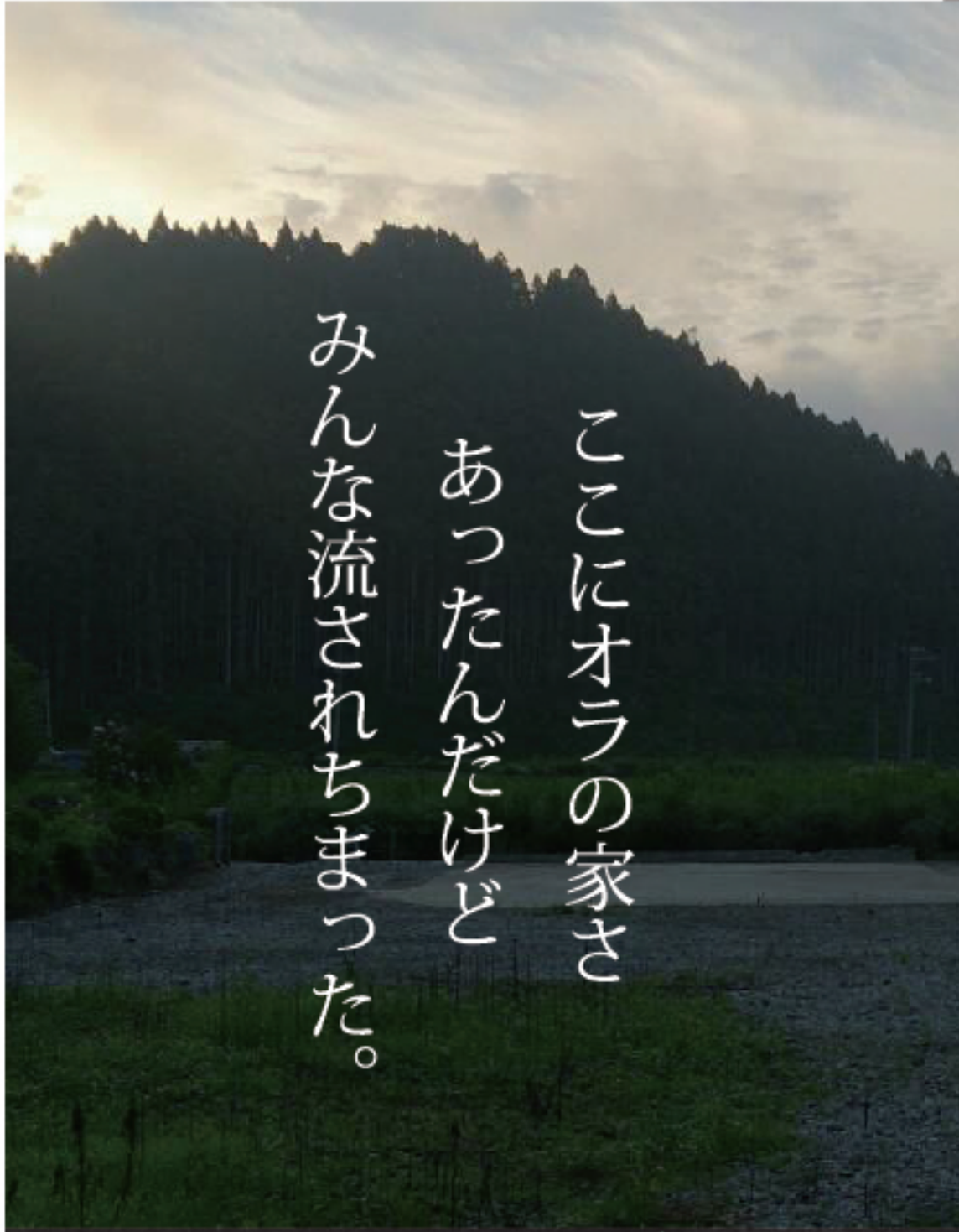
宮城県石巻市
相川・小指地区

関東と東北をつなぐ
フリーペーパー

結心

つなげよう
つながろう



結心　石巻号
発行日：2014 年 10 月 30 日
発行元：東海大学チャレンジセンター 3.11 生活復興支援プロジェクト

3.11 Life Care Project
生活復興支援

目次

復興の足跡

interview
キーパーソンに聞いてみた
ついつい使っちゃうから考えてみた
「絆」って結局どういうもの？

現状紹介
4年目の石巻復興
～過去と現在から見つめて～

あげるひと、もらうひと
特定非営利活動法人パルシック

フリップアンケート
「みんなでもう一度やってみたい事は何ですか？」

どんぐりハウス周辺マップ

編集後記

結心（ゆいっこ）とは

このフリーペーパーには、被災地と関東の人々の心を結ぶことで助け合いの絆を深められるようにという想いを込めています。タイトルは助け合いや協力と言った意味を持つ「ゆい」という言葉に、東北の方言である接尾語「っこ」を合わせたもので、これに「結心」と漢字を当てた造語です。

今回の紹介地は、宮城県石巻市北上町十三浜相川地区・小指地区です。

復興の足跡

泊区公民館竣工式

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が起きました。震災の規模は大きく、東北地方をはじめ日本全国に壊滅的な被害を与えました。東海大学湘南キャンパスでも少しではありますが震災の影響を受けました。その中で、建築学科杉本洋文教授を筆頭に初代プロジェクトリーダーである下田奈祐を中心とした初期メンバーで岩手県大船渡市と宮城県石巻市に仮設公民館「どんぐりハウス」を建設しました。これが3、11生活復興支援プロジェクトの最初の活動であり、発足のきっかけとなったのです。その後、被災地だけでなく関東でも多くのイベントや企画を行い活動してきました。

【これまでの活動と今後の方針】

2014年度最初の活動は、初年度に建設した「どんぐりハウス」移設に向けた「どんぐりハウス」解体作業です。2011年の完成から、多くの地域住民やプロジェクトメンバーがこの「どんぐりハウス」を活用してきました。また、2014年7月には新たに「泊区公民館」が完成しました。これは仮設公民館ではなく常設の公民館であり、泊地区の住民や自分たちプロジェクトメンバーにおいて今まで以上に交流の場が増え、自分たちの活動にも幅が広がるのだと感じます。三年前ではどんぐりハウス建設など目に見える活動を多く行ってきました。現在では目に見える活動ではなく、住民の心の問題や関東の人々に被災地の状況を伝え実際に現地に行ってもらうきっかけを創る活動を中心に行っています。これは活動の成果をはかることが難しく、直接復興活動に携わっていないのではないかと疑問に思う活動でもあります。しかし、今の被災地にはこのような活動が必要不可欠だと自分は考えています。自分をはじめメンバーが現地に行くと、住民の方々は快く自分たちを迎え入れてくれますが、地域全体での活気のようなものがどこか足りないと感じます。

また、自分たちの企画やイベントに参加してくれる住民の方々も固定化されている傾向があります。いくら土地が豊かで道路や瓦礫の撤去が進んでも、その場所にいる人々がこのような状況では意味がありません。この問題を解決するためにも先ほどの心の問題を解決する必要があるのだと感じます。土地とそこに住む人、この二つが揃ってこそ本当の復興であり、目指すべき場所なのだと自分は考えています。そのため、ほんの些細な事かもしれませんが、学生である自分たちが出来ることを精一杯考え、少しでも復興の礎を築くことが出来るよう日々精進し活動していきます。

【プロジェクトリーダーとして】

三年前、自分は高校生であり栃木県の母校で授業を受けていました。最初はただの地震だと思い先生や友達も気にすることなく授業を続けていました。しかし、次第に大きな揺れとなり、校庭に避難しました。あの時の記憶は鮮明に覚えています。被災地に比べると小さな被害でしたが、自分にとってはとても恐ろしく感じました。一週間ほどで母校の授業や部活動は再開しましたが、自分が所属していた野球部は東北の学校との練習試合がすべてキャンセルとなり、東北と栃木県での被災状況の違いを思い知りました。

2014年現在の泊区港の様子

その後、ニュースなどのメディアで自分の経験したものよりもはるかに大きな被害を受けていることを知り、自分も何か出来ることがあるのではないかと考えていましたが行動に移すことは出来ませんでした。それから東海大学に入学し、高校時代に出来なかったことを成し遂げるために3、11生活復興支援プロジェクト入りました。それから一年間活動し2014年度プロジェクトリーダーとなりました。

リーダーとなってすぐはリーダーとして何をするべきなのかなど多くのことに戸惑いを感じ活動してきました。特に「現地では何が求められているのか、何をするべきなのか」を考え結論を出しますが、果たしてその結論が正しいのか間違っているのか、いまだに疑問に感じます。

また、プロジェクト全体をどのようにまとめるかなど多くのことに不安を感じ2014年度スタートとなりました。昨年、自分がプロジェクトに入りたての時は先輩方の指示に従い活動するだけの存在でした。しかし、プロジェクト全体をまとめる役職に就き、プロジェクト活動の本当の意味を理解することになりました。ただ言われたことをこなす事は正直誰にでも出来ます。そうではなく、自分で考え行動に移すことが最も重要な事であり、必要な事であると感じます。そして、リーダーや幹部だけが活動の主軸を決めるのでなく、全メンバーが意見を出し合い協力し活動することが自分の考える理想のプロジェクトの姿です。正直なところ、自分はサブリーダーを中心に幹部メンバーに助けてもらってばかりで、一人だけではここまで上手くプロジェクトをまとめられませんでした。活動するたびに自分は周りのメンバーに恵まれているのだと感じます。このメンバーと共にリーダーとしてプロジェクトのため、被災地のため全力で頑張っていきます。

最後に、自分は復興支援の終わりはまだまだ先だと思っています。ニュースなどのメディアでも最近は毎年の3月11日しか取り上げられないことがほとんどです。この問題がいつ解決するのかは誰にもわかりません。その中で自分たちは今出来ることを精一杯行い、後輩達に引き継ぎながら活動していきます。

石巻市どんぐりハウス

文：花塚優人

キーパーソンに聞いてみた

ついつい使っちゃうから、考えてみた。「絆」って結局どういうもの？

今や、巷で汎用される「絆」という言葉は、今日ではどんな意味をもつのでしょうか。はたまた力を失くし、形骸化した言葉なのでしょうか…。石巻の地に長きにわたり住み続けている、かつて石巻市・相川地区の自治会長を務めた鈴木学さんに聞いてみました。そこから見えてくるリアルな地域の姿、そして必要とされるモノとは…。

バラバラになったコミュニティ

鈴木さん　何について話すの？

中村　今回のブリーベーパーのテーマが「結果」ということなのですけれども…。

鈴木さん　今流行りの「絆」とかと一緒だと思うけど、この地域は昔からその「絆」が強い地域だったの、ずっと。例えば今日はワカメがたくさん取れたという時には、みんなで協力して。ただ、昔の街の流されたところに住んでいた人たちは、こっち行ったり、あっち行ったりと、バラバラになっている。仕事上あっちのほうが便利とか。昔は、みんな近くにいたけれども、いまは地域の中のコミュニティがバラバラになりつつあるの。

中村　ここの集落はそのバラバラになった内の一つなのですか？

鈴木さん　この集落も、前はバラバラではなかったけれども、結果的には集団移転地が分かれてしまうから、それによってグループ化されてしまって。震災当時はみんなで一か所に移転しましょうという話だったわけ。ただしこうして、高台移転が長引くほど、モノの考え方が違ってきて…。

中村　それで食い違いが起きてしまって、バラバラになってしまったと。

鈴木さん　だからそう、今は「絆」とかが薄れてきてしまったのが、今の地方の問題なのさあ。どこでも、ここだけじゃなくて、全体的な話なのだと。

願うこと、思い通りにいかないこと

鈴木さん　市にお金が入ったら、まずは人口の多いところから順にお金がはいって、人の少ないところはあんまり恩恵を受けられない。同じ住民だし、しっかり税金も納めているし、それなのに何でこっちは置き去りなの？例えば、集会所を作りたいといった時に、10軒しかないところに、大きいのは必要ないでしょ？それが30軒あればさ、施設が立派になる。だからなるべく寄せて、大きいものつくって、そこでスポーツできるような施設が欲しいな、と思って。前は小学校の体育館とかを利用して、バレーボールしたり、卓球したりしていたの。

中村　その小学校がなくなるとなると…。

鈴木さん　そう、場所がなくなったわけでさ、昔は若い人たちがそこでバレーボールのチーム作って練習したりしていたけど、それが出来なくなったわけ。それをなんとかしてくれっていう要望は出してるんだけど。

中村　なかなかいかないのが実情ですね。

鈴木さん　そう、集落的にもっと大きいとこならできるかもしれない。相川小学校区っていう括りでやれば、なんとか作れそうなんだけど、いまはそれで要望している。

中村　そうすればエリアがかなり広くなりますよね？

鈴木さん　でも相川小学校区でも人が減ってきていて、最初およそ200軒あったのが震災の後あたりで50軒くらい減ってしまった。子育てするところがなければ誰も嫁さんなんて来ないよ、苦労するだけだよと。

中村　どうしてもネガティブな側面ばかりイメージしてしまうんですね。

安久　じゃあ皆さんはあまりプラス思考では考えられないのでしょうか？例えば小学校を作るとか、スポーツの施設を作るとか。

鈴木さん　そういう意思はみんなあった。今もいろいろ交渉しているけれども、話し合いをして、折衝して、要望書を出して。それはみんな共有しているところなんだけれども、要するにそういう複合施設、図書館や子供たちの学童保育、遊び場とかを入れられるようにして、週何回かそこで塾を開けるようにしてもいいと思う。ここからは車で30分は走らないと、金融もない、郵便局もない。歩きで行こうとしたら、とてもじゃない。学校さえも遠いでしょ。だから私は、そういう複合的なのを要望しているの。学習塾だってそう。

中村　確かにないですね、学習塾は。

鈴木さん　それで、子供たちを送っているんだよ、お母さん方は、学習塾まで。それは無駄な金だってさ。送るために金払うんだよ。でもそういう施設を作って、学習塾開いて、ボランティアでもいいから教えてくれる。それでもいいかなと思ってるんだけれども。ここの子供たちは、学習がとても難しい。不思議と、ここの学校の先生たちは、昔から、ひとりで教科を複数持ってる。先生も大変だし、教わる子供も大変だし。だから、学習塾入ってると、子供は伸びるの。教え方が違うもの。そういう環境だけでもせめて作りたいな、と思ってるのさ。

中村　とにかく集まれるような、みんなが何かをできるような場所ですよね。

鈴木さん　その考えには賛同しているの、みんな。そのことが嬉で、まとまるかもしれないしさ…。現実はそうだな、昔の面影がなくなったというか。それが哀しいね。

「絆」とは何ぞや？

中村　先程から、「絆」は大事だよ、ということで繰り返し出てきましたが、この三年間、余りにもマスメディアにおいてそれが使われすぎている気がするんですよ。時が経つにつれて、言葉の中身みたいなものが薄れていっている気がしてならないんです。

鈴木さん　俺も最初は、「絆」ってなんだろうって思った。もともと、「絆」っていっても、元々あるように思っていたから。

中村　意識しなくてもよかったということなのでしょうか？

鈴木さん　そう、だから何で「絆」なの？という印象。逆にそう思ったよ。元々そうやって自分たちは生きてきたから、当然のものと思っているわけだね、田舎の人たちは。都会にはないかもしれないよ。隣は何をする人？だからさ。そういうところでは「絆」って大事だと思うけど。

中村　私たちみたいに若い年代とかは、何かあるとすぐに「絆が大事だよ」というようにとても軽い感覚を持って使っていますが。

鈴木さん　今俺らは「絆」っていうよりも「結って」と言ったほうがしっくりくる。そういうスタイルをずっとやってきたから。田んぼとか、一人じゃ大変だから、みんなで手伝うのさ。サラリーマンの仕事に、そういう「結」は必要とされないし。逆に都会ではもとよりそういうのがなかったから、少しでも結びつけば「絆」だな、と。

（◀次ページに続く）

4年目の石巻復興
～過去と現在から見つめて～

中村　こっちから意図的に作るものではなく、もとより存在する。

鈴木さん　みんな「絆」が崩壊しているって思っているかもしれないよ。でも、出会った人たちが、また帰って来たいと、言えるような街にしたいわけだ。それが残った人たちの願い。だから、せめてハードの面だけでも、ちゃんとしたのが欲しいなあ、と思ってるわけ。

中村　あくまでこっちから後付けで「絆」と言ってきて、意識するまでもなかったとのこと。それが力を持っているとかそういうことは考えなかったですか？

鈴木さん　震災の石碑とかにも、「絆」っていう文字は必ず入ってる。あれは新聞だのテレビだのが作ったもの。下から上がってきた言葉でなくて、逆に「絆」ってこういうものですよと流していったの。まあ、この震災で、「絆」にもいろいろあるんだけれども、ボランティアとかの「絆」は確かに出てきたよ。初対面の人でも、握手して、一生懸命がれきとか片付ける、それも「絆」の一つだから。地域の「絆」ではなくて、ボランティアとか、遠方からやってきて、そういうのに対して「絆」って捉えられるんじゃないかな。

安久　関東圏と、被災された方々では、解釈が違うと思いますけど。関東では、困ってるところを助けるということを指してると思うんですよね。

鈴木さん　テレビとか新聞とか言ってるのは、ボランティアとかの人たちが来て、手を結んで、やってるのが「絆」だと。だから、下から上がってきた地域同士の「絆」じゃなくて、他から来た人たちと、一緒になってやっていくのが「絆」として捉えられてると思うんだ。そういう「新しい絆」が生まれてきている。結論はそこだな。

中村　長いインタビューになってしまいましたね。お付き合いいただき、ありがとうございました。

鈴木学
石巻市北上町十三浜相川地区の元自治会長。震災発生時にはその場で相川子育て支援センターに開かれた避難所で所長を務めた。現在は同地区の自治副会長を務める（2014年8月現在）。

◆

まだあのショックから立ち直り切れていないこと。「絆」という言葉だけでも、関東と被災地・石巻では捉え方が違うということ。そして、少なからず「絆」が力を持ち、そこにいる人たちの支えとなっていること。

この地域の本当の復活は見えてきませんが、葛藤がありながらも、動きつづける人がいます。それでも、時間は限られます。その言葉は、より大きな力が必要だという訴えにも聞こえました。東北の復活なくして日本の復活なし。必要とされる最後のピースは私たち自身なのかもしれません。

（取材　中村浩貴／撮影・補佐　安久拓郎）

石巻市北上町の状況

東日本大震災から四年目を迎える今日であるが、復興が大きく進んでいるとは言えない状況である。しかし、当時ほどメディアは震災についてとりあげていない。仮設住宅には500人を超える人が生活をしているものの、あと二年で解体しなければならない。この状況であなたならどうするだろうか。現地だけではどうにもできないのが現状だ。

吉浜小学校、相川小学校が津波の被害を受けた。唯一残った橋浦小学校と統合し、北上小学校として開校、現在両校の小学生の子どもたちも通っている。また、更地となった吉浜小学校の校舎と体育館の間に国道398号線が通っている。この道路は現在も周辺で道路整備を行っている。相川運動公園団地とにっこりサンパークの仮設住宅からの高台移転先は決まってではないかと考えさせられてしまった。他にも小・中・高等学校が遠いため子どもたちだけが仮設住宅を出て行き、家族で一つ屋根の下で暮らせないのも悩みの種だ。家族はやはり同じ食卓を囲むのが一番であり、その為にも仮設住宅から出たいと話される方は多かった。

いるが、手付かずの状態である。その影響で仮設住宅に留まる期間は延長されてしまっている。計画だけではなく、実行しないと復興が進まないのは当然のことだ。これらは今後の生活をしていく上で必要なことであるが、現地の方々の生活にもっと目を向けることが重要であると感じられる。

絆は昔からここにある

2014年8月、夏らしい流し素麺のイベントを行い、相川・小指地区の仮設住宅に住む方々と交流を深めた。ここでは生まれも育ちも石巻で、もう70年以上この地にいる人や震災以前に来られた人などさまざまな方が生活をしている。住民の方は「この場所、石巻で生きていくことを決めている」と話されていることが多く、石巻に愛着を感じているという思いを知ることができた。その中でも話題に上がったのはやはり絆。石巻の方々は昔からこの地には絆があると言う。だからこそ助け合うことができ、これからもそのつもりだそうだ。一方、震災後に新しい形の絆が生まれたという声も聞かれた。それは私たちのように外から来る者との絆だ。この新しい形の絆を良い方向にもっていければ復興はより良くなるのではないだろうか。

前向きな住民の方々

流し素麺のイベントには子どもから大人まで夢中になっていた。自治会会長の鈴木さんは、「このようなイベントをやってくれるのは嬉しい」と話された。どこの地でもそうかもしれないが、イベントを通じて繋がるものは多い。そこには、確かな笑顔があった。仮設住宅という不安な状況にありながら、ここでの繋がりを明日への希望としていこうとする前向きな思いがここにはあった。

仮設住宅から出たい！

明るく前向きな志向を見せてくれる住民の方々。しかし、「仮設住宅から出たい！」という声を聞き流すことはできなかった。家の壁が薄い事から子どもは大きな声を出せず、小さな喧嘩もろくにできない。何より遊び場や道具が限られているため、幼い子どもたちに窮屈な思いをさせてしまっているのう。復興とは、建物だけでなく人の心が建て直されて初めて活きる。それは人と人の小さな繋がりから進んでいくものなのかもしれない。

取材・記事担当
熊谷・金子・鈴藤

今だからこそある思い

震災と、その後を振り返って改めて思うことは、被害が大きかったということだ。復興が進んでいないと考える人は多く、震災によって受けた心の傷には深いものがある。子どもたちのショックも大きかった。ようやく落ち着いてきたが、これからも心のケアが必要だ。しかし、悪い事ばかりだけでなく、新しい繋がりや絆がここに生まれた。

こころの復興をしよう

課題の多い現状ではあるが、私たち一人ひとりに出来ることはないのだろうか。足を運べるのなら行って見るのも良いだろう。東北の物品に触れてみるのも良いだろ

あげるひと・もらうひと

特定非営利活動法人パルシック

パルシックは震災直後から被災地で炊き出しや物資支援などを行ってきた団体だ。三年経った現在でも様々な活動で宮城県石巻市北上地区を支援している。今回は2012年2月から北上支援事業現地勤務スタッフとして活動されている西村陽子さんと震災直後からパルシック被災者支援現地スタッフとして活動し、現在は復興応援隊に勤務している日方里砂さんにお話を伺った。

にっこり農園の様子

――なぜ、支援活動に参加することになったのですか？

日方さん　もともと、パルシック東京事務所に勤務していました。震災直後、東京で物資の調整などを担当していたんですけど、その当時って誰もがそうだったと思うんですけど自分も何かできないかっていうモヤモヤがあって、直判をして無理やり東北に来ました。

――震災後初めて石巻を訪れたとき、どう思いましたか？

西村さん　2012年2月にこっちにきました。その時はまだ、所どころ道路は舗装されていなくて堤防あたりのガードレールも無かったため、来て一週間くらい経ったころに大雪が降ったのですが、車が滑って怖かったです。畑は見ただけでは分かりませんが掘り返すといろんなものが出てきました。総合支所や吉浜小学校は酷い状態のままでした。小学校の裏山の木には洋服などが引っかかっていて、そういうものを見ると胸を締め付けられました。こういうものも全部、元々ここに住んでいた人たちの財産だったんだなと思うと起きた事を改めて認識させられました。

――活動していて嬉しかったことは？

西村さん　住民さんたちが声をかけてくれること。私が仕事で東京に向かう電車に乗っていると「西村さん、ジャガイモある？カレーを作りたいんだけど・・・」なんて電話がかかってきたこともありました。にっこりサンパークの仮設住宅は長屋みたいな他にないほのぼのした感じがたくさんあるんです。住民さんは子供もおばあさんもみんなボランティアの扱い方をよく知っているので来る人たちをオープンに受け入れてくれるんです。

――辛かったこと、大変だったことは？

取材に答えてくださる西村さん（左）

日方さん　「NPOはタダでなんでもしてくれる」っていうのが住民さんたちに染みついてしまっていました。2011年3月頃から「私たちは簡単にはお金は出せませんよ」っていうルールをなんとなく作ったとき、それを伝えるのに苦労しました。物資を配るにしても単に配るだけだと集落間に上下関係ができて亀裂が生じてしまったり、役所職員さんが住民と支援者の板挟みになってしまうので、サポートの方法とかも悩みました。

西村さん　住民さんに誤解されたりトラブルなんかは仕事したり人と付き合っていたら当然発生するものなので、それを苦痛に感じたことはないです。むしろ大変なことがあるから支援が必要で、困難もないような場所なら支援なんかなくても最初からうまくやっているはずです。うまくいかないからこそ、誰かが行く意味があるんです。

――パルシックとしての最終的な目標はなんですか？

日方さん　今はなんとなく落ち着いているように見えますが住民さんたちが仮設を出ていくとき、必ず最後まで残ってしまう人たちがいます。そういう人たちを最後の一人まで見守ることです。

――今だからこそ、支援団体に求められているものはなんだと思いますか？

日方さん　これからの支援はまちづくりの話になってきます。ただ、そこに本気で関わろうと思ったら10年は現地で住む覚悟が必要です。そうすると若い世代の人たちがまちに入りやすい環境を残して自分たちは引いていかなければなりません。また、自分たちは常に引き際というものを頭の隅に置いておかなければなりません。引き際を間違えてはだめですが、やっぱりこのまちには親しみがあるので、それを見極めるのは難しいです。

西村さん　やっぱり持続可能につきますね。今までやってきたものが管理が面倒だとか、管理人の後継者がいないだとかの理由で無くなってしまうのはすごくもったいないです。でもそれは最初の段階で支援がどこまで行き届いていたかが問われます。また、どの団体も直面している問題だと思いますが活動を続けていくにはお金がかかります。この資金はどこからでるのかという問題になり、来るボランティアもますます減少してしまいます。そういう中で、震災直後からやってきたものがもったいない形で途切れてしまわないように、活用してもらえるようにすることが大切になっていきます。

北上地区で採れたものをふんだんに使った料理

新古里＝にっこり

結んできた絆 そしてこれから

西村さんに取材をさせていただいていると、日曜日の休日にもかかわらず、「こんにちは、あの、キュウリが欲しいんだけど・・・」と住民の方がにっこり農園を訪ねてきた。西村さんや日方さんが北上地区の人々と築いてきた信頼関係を感じた瞬間だった。「ここで活動していると、与えるものだけじゃなくってもらうものもたくさんあるんです。」西村さんと日方さんはそう話していた。支援する人とされる人の間にあるのは上下関係ではなく対等な関係なのだ。

にっこり農園は昨年まで、瓦礫や塩害で農作物が育つ状態ではなかった。今でも土を掘り返すと小さな鉄の破片などが混じっているが、山の土を混ぜるなどしてだいぶ良くなったそうだ。また、最近、農園でとれた野菜を利用してお弁当やお惣菜を作って販売できるように農産物加工場も導入したそうだ。畑を見学させてもらうと数十本のひまわりや元気で立派なキュウリがなっていた。「これからはもっとたくさんの人に農園を利用してもらって、とれた野菜でレストランとかできたらいいなと思っています。」と西村さんは話していた。

担当：伊藤・杉江・菅原

パルシックの説明をしてくださる日方さん

NPO法人パルシックは東ティモール、スリランカ、マレーシアを拠点に経済活動支援や内戦で崩壊したコミュニティの復興事業を行っている。特にフェアトレード（途上国の製品や原料を適正な価格で継続的に購入することで立場の弱い人たちの自立と生活の改善を目指す取り組み）に力を入れており、現地で栽培されたコーヒーや紅茶などを販売している。東北でも震災直後から避難所への物資支援を行っていた。また、2012年3月までは在宅被災者支援として地域交流センター「おちゃっこ」の設置、現在は北上町十三浜の生業復興支援などを行っている。

HP：www.parci.org/

「結束」の重要性を伝えたい

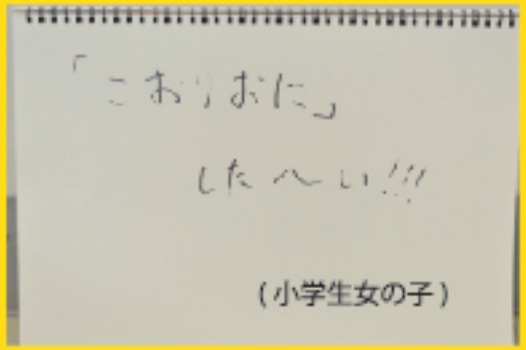
みんなでもう１度やってみたい事は何ですか？

今回の取材地である相川地区やにっこりサンパークの住民の方に、『みんなでもう１度やってみたい事は何ですか？』というフリップアンケートを行いました。被災地の方々がどんな思いを寄せているか紹介します。

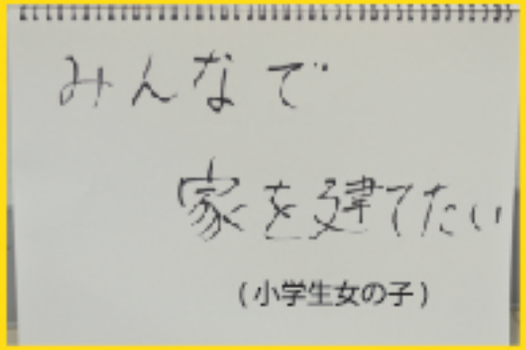
震災後は一部の自治会員しか集まってないイベントを、震災前のように全員でイベントを企画したいという住民の方。

こどもたちの声

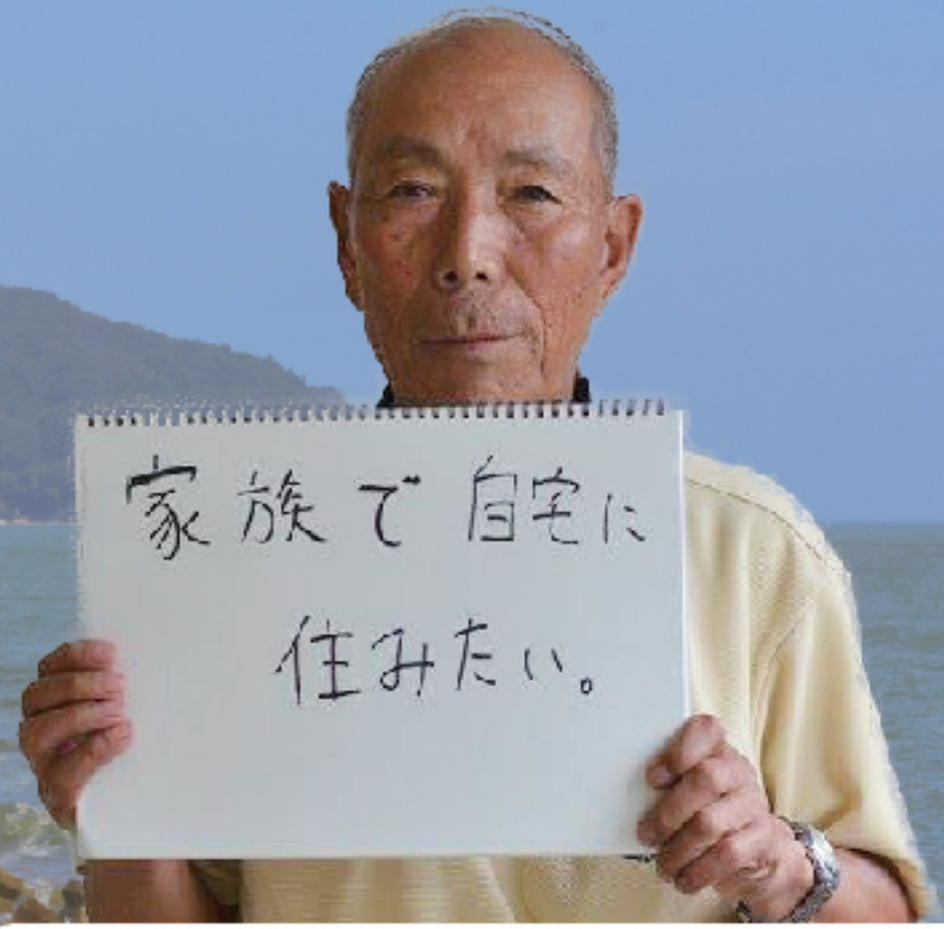
相川地区のこどもたちから皆で一緒に遊びたいという声や、家族で何かしたいという声が聞かれました。そんなこどもたちの声を一部を紹介します。



（小学生女の子）



（小学生女の子）



家族で自宅に住みたいという青山さん。石巻市内の中心部に住んでいるご家族との時間を大切にしたいそうだ。

撮影場所：石巻市北上町海岸付近　　撮影・取材者：藤崎、菊池、二見、土谷

石巻どんぐりハウス 周辺マップ

45

64

197

398

398

北上川

追波湾

道の駅「上品の郷」（じょうぼん さと）

レストラン
10:00 ～ 20:00

温泉施設
9:00 ～ 21:00

石巻の名産はもちろん
バイキングや温泉など
上品の郷ならではの施設がある
TEL(0225)62－3670

にっこりサンパーク

テニスコート野球場などの
運動場が借りられる！
青いアーチの看板が目印

吉浜小学校

新古里農園

金毘羅崎

どんぐりハウス

仮設相川運動公園

住所　石巻市北上町十三浜崎山 41－1

東京からの行き方

東北新幹線または高速バスで仙台駅
仙台駅からレンタカーで1時間 30 分

担当：三谷

編集後記

あなたの苦手なものは何ですか？

interview

中村：（その1）ここで下手にボケて滑ってアホ面晒しちゃうこと。

安久：ホコリ

フリップアンケート

藤崎：人が多い所。

菊池：電車の乗り換え

二見：犬が怖い！！

土谷：サメ（夢によく出てくる）

現状紹介

熊谷：マスコミ

金子：人込み

須藤：炭酸飲料

どんぐりハウス周辺マップ

三谷：チョコレート

表紙

川根：無茶ぶり。

復興の足跡

花塚：徹夜の作業中に突然流れるホラーのCM。

編集

増澤：「データがありません。」

山崎：階段の下り

山口：新聞配達の音。

城森：孤独

あげるひと、もらうひと

伊藤：パソコン

杉江：職員室

菅原：縛り物、人と話すこと

結心では皆様からのご感想を募集中！

ご意見ご感想がありましたら、下記のアドレスまでお送り下さい！

E-mail:yuikko.311@gmail.com

発行日	2014 年 10 月 30 日
発行責任者	花塚優人
編集責任者	増澤水緒
発行所	東海大学チャレンジセンター 3.11 生活復興支援プロジェクト
問い合わせ先	〒259 - 1292 神奈川県平塚市北金目４－１－１
TEL	0463 - 50 - 2472
HP	http://deka.challe.u-toukai.ac.jp/3.11lcp/